

知っ得！

日本史研究
最前線！

源頼朝像は これだ！

——— 東京大学名誉教授 黒田日出男



甲斐善光寺蔵「源頼朝坐像」(部分拡大)

神護寺蔵「伝源頼朝像」への疑問

源頼朝の肖像というと、かつては神護寺蔵の国宝「伝源頼朝像」が定番であった。威厳に満ちた表情をした、三十歳代の肖像画であり、誰でも知っている源頼朝像であろう。しかし、1995年3月に美術史家米倉迪夫の著書『源頼朝像 沈黙の肖像画』（平凡社）が発表され、神護寺の「伝源頼朝像」の像主は足利尊氏の弟直義であるとした。

美術史家の一部に感情的な反論が見られたが、それに対して、米倉説を支持する私は『国宝神護寺三像とは何か』（角川選書、2012年）を書き、同寺蔵の「伝平重盛像」は足利尊氏、「伝源頼朝像」は足利直義、「伝藤原光能像」は、室町幕府の二代将軍となった足利義詮であるとする米倉説を、絵画史料論の立場から裏付けたのである。そして2015年には、中世政治史の研究者である森茂暁も、『足利直義』（角川選書）を発表し、その第7章において米倉・黒田の仮説を支持している。

それに対して、明治以来の古い仮説である源頼朝の姿とする旧説の方は、それを裏付けてくれる

本格的な研究論文がほとんどない。これが実情である。今後、旧説を支持する論文が散発的に書かれることはあると思うが、米倉・黒田・森と続く仮説を揺るがすことは困難であろう。神護寺の「伝源頼朝像」を足利直義像とする仮説は、ほぼ間違いないものになってきている。

真の源頼朝像とは？

ならば、真の源頼朝像とは何か。それを明らかにしたのが、拙著『源頼朝の真像』（角川選書、2011年）である。すなわち、世に源頼朝像と称される絵画や彫刻は数多いけれども、近世以後につくられたものが大部分である。当然、補陀洛寺（鎌倉市）蔵の源頼朝坐像（寺伝では自刻像）などは考慮外となる。中世、それも鎌倉時代に制作されたものはほんの僅かしかない。その一つは、東京国立博物館蔵の、重要文化財に指定されている「伝源頼朝坐像」（彫像）だが、『源頼朝の真像』第二章で明らかにしているように、本来、狩衣姿の北条時頼坐像であったのだ。その像の腹部に「石帯」

と「平緒」をつけて束帯姿もどきにし、「源頼朝像」にしたのである。変改した時期は天文九(1540)年、寛文八(1668)年、そして文政十一(1828)年のいずれかであろう。また、大英博物館蔵の源頼朝像は、神護寺の「伝源頼朝像」を写したものであり、鎌倉末期の制作とされ、神護寺の「伝源頼朝像」を鎌倉初期の作品とする論拠とされてきた。しかし、碩学上横手雅敬と私がほぼ同時(1996年)にそれぞれ論文を発表し、この源頼朝像は、早くても江戸時代後期、もしかすると明治時代の作品であることを明らかにしたのであった。

そして唯一、残ったのが甲斐善光寺蔵の「源頼朝坐像」なのである。この「源頼朝坐像」には胎内銘があり、難読だが下図のような内容である。すなわち、この甲斐善光寺蔵の「源頼朝坐像」を調べると、次のようなものすごい作品であることがわかった。

右大將殿(源頼朝)が正治元年正月十三日にお亡くなりになった。二品殿(北条政子)の御沙汰によって、この御影(肖像)がつくられ、当善光寺の遊なにかしによって御堂へ遷された。両度(文永・正和)の火災によって(御堂が)焼失したけれども、御影の御躰の首の部分は何んとか取り出された。そうしている間に、観阿弥陀仏の沙汰によって、このように御繕修がなされたのである。

文保三(一三一九)年五月六日

甲斐善光寺蔵「源頼朝坐像」の真実

第一に、この頼朝像は、妻の北条政子の命によって造像され、信濃(長野)善光寺に安置されていた。つまり、頼朝の死後まもなく造像されたと判断でき、その頭部は13世紀初頭の肖像彫刻であったのだ。鎌倉前期の頼朝像が残っていたということだけでも驚嘆に値する。その面貌は、晩年の面貌をリアルに写していると思われる。じつに威厳に満ちた、たくましい顔であり、これこそ現存唯一の、肖似性の豊かな源頼朝像なのである。

第二に、なぜ善光寺に安置されたのかといえば、源頼朝と北条政子が善光寺如来を深く信仰してい

たからである。平安末期に信濃善光寺が全焼したことは『平家物語』で知られているが、その善光寺の復興に力を尽くしたのが源頼朝と北条政子であった。真の源頼朝像が善光寺にあるのは、とてもふさわしいことなのである。

そして第三に、それがどうして信濃善光寺ではなくて、甲斐善光寺に伝来したかといえば、それは川中島の戦いに行き着く。長野善光寺は川中島の近くである。上杉謙信と武田信玄は、北信濃の領土だけでなく善光寺如来と善光寺をも奪い合ったのだ。そして信玄は、善光寺を根こそぎ甲斐に移してしまう。その時、源頼朝坐像も甲斐へ運ばれたのである。

甲斐善光寺のその後と「源頼朝坐像」

善光寺如来は一時、豊臣秀吉によって京都に遷されるが、やがて長野に戻され、長野善光寺が復活する。しかし、甲斐善光寺はそのまま残り、今も巨大な本堂が聳えたっている。宝物館があって、そこに「源頼朝坐像」は静かに坐っている。その脇には「源実朝坐像」(彫像)もある。母である北条政子がつくらせた彫像であり、長野善光寺に安置されていたものだ。頼朝像と同様に、実朝の面貌をよく写しているじつに魅力的な肖像である。

甲斐善光寺の「源頼朝坐像」は、髣髴部は文保三年のものだが、頭部は13世紀初期のものであり、紛れもなく晩年の頼朝の面貌を写している。私は、美術的にも歴史的にも、国の重要文化財に指定されるべき重要な作品であると判断している。

この善光寺像が、教科書で次第に源頼朝像の定番となりつつあるのも当然であろう。ぜひ甲府にある甲斐善光寺を訪れて、宝物館内の「源頼朝坐像」と「源実朝坐像」とじっくり対面していただきたい。



甲斐善光寺蔵「源頼朝坐像」(全体)